

容については、クライアントの重要な資源として活かされるべきものであろう。

教員のストレスとその対処の質的研究：中学教師の語りより

佐々木 誠

本研究は、「教師がストレスと対処をどのように経験するか」を明らかにするために、岩手県下の公立中学校教員31名の語り(narrative data)について解釈学的現象学的分析(interpretative phenomenological analysis)に準じた方法で分析を行ったものである。具体的には、面接内容を書き起こしたテキストを、内容のまとまりであるセクションに分け、それぞれにその表象している内容を表すラベルを付けていき、それらをさらに本質的な何かをとらえた内容ごとにまとめていくことを繰り返していった。その結果、以下の点が明らかになった。1) 対処機能の本体である「一次資源」、その背景にある「二次資源」、ストレスの本体である「直接要因」、その母体である「危機的要因」、ストレスの結果である「態度変化」と「情緒変化」の6要因群が確認された。2) これらの要因群を構成する具体的内容と他の要因群との関係を検討した結果、教師は自分の実践が「ゆらぐ」感じを持ったり、また、子どもやその親、あるいは同僚など、周囲にいる職務上関わる他人と「つながらない」とか、職務遂行上でどうしたらよいか「わからない」と感じた際に、ストレスを感じるといえる。3) 具体的には、要因群の1つである「一次資源」を構成する「対処資源」「目的資源」「エネルギー資源」の3つを低下させるような働きがこの背景にあると考えられる。4) 対処についても、それを手段としてだけでなく、さらに目的や感情をエネルギーとする見方を加え、プロセス的なものが教師の力量を高める働きをすることが示唆された。5) さらにバーンアウトについては、脅威がバーンアウトに直結するのではなく、対処のあり方との関係でそれが生じると考えられる。おそらくは、対処方略の決定からその実行に移る段階で必要とされる「目的資源」と「エネルギー資源」が弱体化していることが、バーンアウトにつながるのであろう。

警察の被害者支援における支援者側のストレスに関する研究

佐藤 敦

警察職員に対しMBI尺度(Maslach Burnout Inventory)を用いてバーンアウトを測定した。結果を「女性」「交通」「刑事」にわけて比較したところ、「交通」課員が最も高いバーンアウト症状を示した。これは交通警察業務の対象が偶発性の高い交通事故であること、それに伴う被害者とのやり取りが時に示談交渉等の利権に絡むものであること、従って純粋に「被害者支援」の対象として関わるには困難が伴うものであることが理由として考えられた。

MBI下位尺度は3因子構造を示し、「情緒的消耗感」と「脱人格化」との間に正の相関、「脱人格化」と「個人的達成感」との間に負の相関が見られた。MBIは「情緒的消耗感」と「脱人格化」とが相互作用し、「脱人格化」の増大が「個人的達成感」を低下

せるという因果関係の存在が示唆された。しかし、本研究におけるモデルの適合度指標は十分な値に届かず、他のモデルの適合度との差も小さいことから、MBIモデルの安定性は低いものと思われた。

「被害者支援ストレス」の自由回答内容を整理すると、「女性」は被害者支援の枠組みに乗った上でのストレスを指摘するのに対し、「交通」と「刑事」は支援することそれ自体をストレスとして指摘する傾向が見られた。

「役割葛藤」を引き起こすものとして、被害者支援と捜査を同時に行うのは、「役割葛藤」を引き起こすものであること、被害者支援はどこまでやるのが明確にされていないこと(役割の曖昧さ)等の「役割ストレス」が見られた。特に「役割葛藤」において、被害者支援でストレスを受けた支援者に対する叱咤激励が、結果的に二次的被害を与えた例が見られた。これは精神的強さを求められる警察業務と、傷つきやすさを被害者への共感として活用する被害者支援業務との相反性と考えられた。

バーンアウト低減のためには「役割ストレス」を低減させるため、スタッフへの仕事の割り当てや被害者支援の範囲を明確にする等のガイドライン整備が必要であると思われる。

Ambiguous function assignmentsの意味づけに関する研究

浜渡 千春

Ambiguous function assignment (以下AFAS) とはLankton et al. (1986) によってEnchantment and Intervention in Family Therapyで提唱された「曖昧さ」を伴う面接課題である。これまでは、この課題の有効性は経験的に示されているが、実証データによって確認されていない。本研究の目的は、第一に、AFASのメカニズムを検討することを通して、その有効性を確認することである。第二の目的は、AFASでの「曖昧さ」が持つ肯定的な側面の考察で、この点もこれまではよく検討されていない。男女の大学生15名にAFASを実施し、その内容について収集した面接資料を書き起こして分析することで、この2点を検討した。

この課題を用いることで、「自己について深く考える」「モチベーションが高まる」「新しいことや刺激を発見する」「課題自体が新しい行動のきっかけとなる」などの効果がみられた。また、意味づけに影響を与える要因は、「期待」「義務」「作業に集中する」「具体化・探索の有無」などが考えられた。こうした分析をもとに、AFASでの意味づけのプロセスについてのモデルを作成した。

AFASの「曖昧さ」がもつ意義としては、クライアントがこの課題の「曖昧さ」に自分なりの意味を付与し、面接者はそこからクライアントを理解し、介入するための手がかりが得られるのではないと思われる。治療儀礼との関係では、AFASは期待を高め、プラーシーボ要因を高めることで、クライアント自身の力を引き出すことを狙った課題であると推測された。またこの際、課題を提示するまでの文脈、期待や希望の要因も重要であることが指摘できよう。